香川大学教育実践総合研究（*Bull. Educ. Res. Teach. Develop. Kagawa Univ.*），42：49－60，2021

「保育について語ろうデー」への参加が保育者にもたらすもの

片岡　元子　・　松井　剛太　・　松本　博雄
（幼児教育）　（幼児教育）　（幼児教育）
吉川　暢子　・　桑原　育子*
（幼児教育）　（附属幼稚園）

760－8522　高松市幸町１－１　香川大学教育学部
*762－0031　坂出市文京町９－４　香川大学教育学部附属幼稚園

The Effects of Practitioners' Participation in 'Days for Talking about Early Childhood Education'

Motoko Kataoka, Gota Matsui, Hiroo Matsumoto,
Nobuko Yoshikawa and Ikuko Kuwahara*

Faculty of Education, Kagawa University, 1-1 Saiwai-cho, Takamatsu 760-8522
**Kindergarten Attached to the Faculty of Education, 9-4 bunkyo-cho, Sakaide 762-0031*

要　旨　公開保育と保育討議をあわせた「保育について語ろうデー」への参加者が，参加することにより得た気付きや学びについてアンケート調査を実施した。その結果，参加者は，他園の保育をじっくりと参観したことにより自分自身に向き合う時間をもち，自ら「語りたい」と心を動かすようになるとともに，新たな実践課題を自覚することが見出され，今後の地域における現場間での取り組みのモデルとなり得ることがわかった。

キーワード　保育者　資質向上　公開保育　保育討議　実践課題の自覚

Ⅰ　問題と目的

保育の質の向上が求められている現在，保育者の専門性を高めるための研修の充実の重要性は，誰もが認識するところである。ベネッセ教育総合研究所の調査において，園長が保育実践上，運営上の課題として最も強く感じていることは，「保育者の資質の維持，向上」である[1)]。

そのような中，文部科学省では，幼稚園，保育所，認定こども園等の幼児教育施設の教職員に対する研修体制をはじめ，地方公共団体における幼児教育の推進体制の充実・活用強化[2)]を図っている。

また，2017年の保育所保育指針の改定において，保育士のキャリアパスを見据えた研修体系の構築が示され[3)]，保育所における保育者研修の推進も図られつつある。さらに先般，保育所等における保育の質の確保・向上に関する検討会からは，保育実践の質の確保・向上に向けた取組として「地域において各現場のリーダー層や職員が共に学び合う関係の形成」や「現場間で保育士等が互いに保育を見合い対話する機会の充実・促進」などが示されたところである[4)]。

このように，保育者の資質向上については，各園の保育実践上，運営上の重要な課題であるとともに，国や地方公共団体等においても，地域全体で保育者の研修体制の構築を通した保育の質の確保・向上を図っているところだと言える。

あわせて，現在全国で公開保育や保育討議を伴う研究発表会等が多数開催されている。これらは，実践研究の発表・発信の場であるとともに，参加者にとっても保育者の資質向上のための研修の機会であると考える。関[5]は，研究発表会の意義として，職員の研修・現職教育や協力体制の確立をあげている。しかし，これらは研究発表会の開催園での意義であり，参加者の意義についてはふれられておらず，他にも先行研究は見当たらない。

公開保育を核とした取り組みを実施している片山[6]は，従来の公開保育が，実施する側には重苦しい緊張感の中での保育と立派な資料作りを課し，一方，参観者は，保育よりも保育教材や壁面のアイデアを手に入れたいと考えている現状があることを指摘している。公開保育への参加者は，子どもと保育者が織りなす保育の営みよりも明日からの実践にすぐに役立つヒントを求めているということであろう。

中原ら[7][8]は，カークパトリックの「４段階モデル（1:反応，2:学習，3:行動，4:成果）」を用い，研修で「2:学習」したことが，「3:行動」や「4:成果」につながることを「研修転移」とし，研修で学んだ知識やスキルを仕事に役立て，さらに持続させることが重要であると述べている。片岡ら[9]は，自治体におけるミドルリーダーの育成をめざす研修を対象として，このような「研修転移」が起こるには，「2:学習」と「3:行動」の間に研修参加者の役割の「自覚」と園内での「相談」体制の確立が必要であると指摘し，「循環型６段階モデル」を提唱している。このことから，研修での学習により「自覚」や「相談」が生成されたか，またその結果「研修転移」が起こったかを考察していくことが，研修の効果を評価する際に有効だと考える。

そこで，本研究では，公開保育と保育討議への参加を含んだ園外研修「保育について語ろうデー」を研究の対象とし，参加者がその参加についてどのように感じ，自分の実践や自園の園内研修について振り返りをしたのかを明らかにするとともに，片岡ら[10]の示す「循環型６段階モデル」を手がかりにして「研修転移」の視点から開催の意義について検討することを目的とする。

そのことが，研究発表会や公開保育・保育討議を含んだ園外研修の在り方について検討していく新たな視点を見出すことにつながると考える。

Ⅱ　研究の方法

１　研究の対象

（１）対象について

本研究では，香川大学教育学部附属幼稚園（以下，附属幼稚園と示す）が開催している「保育について語ろうデー（以下，「語ろうデー」と示す）」を研究の対象とする。

国立教員養成大学・学部，大学院，附属学校の改革に関する有識者会議が取りまとめた報告書において，附属学校には，従来の教育実習校としての役割にとどまらず，30～40年間にわたる教職生活全体を見据えた教員研修に貢献する学校への機能強化が求められている[11]。附属幼稚園では，これまで年に一度の研究発表会の開催により，実践研究の成果を公開する機会を設けてきた。しかし，この報告書が示す「公立学校の現職教員のための日常的な研修の場」[12]とはなり得ていなかった。そこで，2018年度より従来の研究発表会とは異なり，より日常的な研修の場としての「語ろうデー」を実施している。

参加者は，登園から降園までの保育を参観し，参加者・開催者全員で昼食をとった後，保育討議に加わる。つまり，自分の勤務園を離れて終日附属幼稚園にて過ごすことになる。参観クラスや抽出児，参観の視点，討議の柱など特別な制約はなく，自由に過ごす。保育討議では，自己紹介タイムを除くと語ることを強制されることはないため，聞き手に徹することも可能である。もちろん参観や討議の合間に開催園や他園の保育者と話すことも自由である。「語ろうデー」の開催については，国公立幼稚園・こども園長会や近隣自治体の保育所所管課等を通して広く案内を行うとともに，園のHPに掲載し周知を図っている（図１）。

図１　「語ろうデー」の案内（2019年度）

2018年度は，年間３回の「語ろうデー」を実施した。午前保育である水曜日に，公開保育（午前）・保育討議（午後）を行った。出来得る限り日常の園の様子を公開したいと考え，１回の参加人数を10人程度に制限した。保育討議は，和やかな雰囲気となるようお互いに顔が見える大きな円になって行った（図２）。

2019年度は，分園（高松園舎）での実施，長期休暇中の半日開催（公開保育なし）を新たに加え，年間９回実施した。全体討議だけでなく，経験年数別・事例別などのグループ討議も取り入れた。

図２　保育討議の様子

（２）「語ろうデー」の参加者

表１は「語ろうデー」の参加者の所属と人数を示したものである。外部からの参加者はのべ135名で，このうち幼稚園教員が96名（全体の71％）を占めている。2018年度は，保育所やこども園からの参加者はいなかったが，2019年度には，あわせて19名の参加があった。のべ12名の小学校教員は，香川県の幼児教育長期研修生として１年間幼稚園に派遣されている教員である。

2019年度は，実施回数が増えたため参加人数も大きく増加した。近隣の市町（坂出・綾歌，丸亀）の教頭・主任等の研修の場としての活用も見られた。大学教員は，語り合う場の一員として参加しており，特に会の進行や指導・助言の役割は担っていない。

表１　「語ろうデー」の参加者

（人）

	幼稚園教員	保育所保育士	こども園保育教諭	小学校教員	大学院生	合計	大学教員
2018年度	31	0	0	5	0	36	7
2019年度	65	12	7	7	8	99	23
合計	96	12	7	12	8	135	30

※数字はのべ人数を表す。

２　研究計画と手続き

（１）参加者に対するアンケート調査の実施

「語ろうデー」への参加者に，参加による気付きや学びについてアンケート調査を実施した。

アンケート調査では，①参加して良かったか，②次回も参加したいかの２問について４件法で尋ねた。あわせて，①参加の理由，②保育参観で心に残ったこと，③保育討議で心に残ったこと，④参加を通して学んだことの４点について自由記述での回答を求めた。

「語ろうデー」への参加者のうち，各実施日

の全日程参加者92名（2018年度23名・2019年度69名）にアンケート調査用紙を配布し，１週間後を目途に郵送での返却を依頼した。有効回答数は，86名（2018年度23名・2019年度63名），回収率93％（2018年度100％・2019年度91％）だった。本研究では，他園の公開保育及び保育討議に参加する現職の保育者を対象とするため，小学校教員・大学院生・半日開催（公開保育なし）の参加者を除く回答（58）から分析を行う。

アンケート調査の際には，研究目的や個人情報の守秘について説明を行い，了解を得た。

（２）アンケート調査の分析

４件法での①参加して良かったか，②次回も参加したいかの回答から参加の満足度について考察を行う。また，自由記述①参加の理由から参加者が「語ろうデー」に何を求めていたのかを考察する。

自由記述②保育参観で心に残ったこと，③保育討議で心に残ったこと，④参加を通して学んだことについては，記述の全てを文字に起こした。②③の記述のうち公開保育や保育討議への参加について感じたことに関する内容を抜き出し，カテゴリーに分類整理した。また，④の記述のうち今後の自身の保育や自園の研修について「～したい」「～していこう」と表現している内容を抜き出し，カテゴリーに分類整理した。研究グループにより，分類整理されたカテゴリー内容を確認し修正した。

（３）研究グループによる成果や課題の検討

大学教員は，「語ろうデー」での討議の様子や，参加者へのアンケート調査の結果から，「語ろうデー」への参加がもたらす効果や本会の意義，今後の在り方について，「研修転移」における「自覚」と「相談」の視点から分析を行った。

Ⅲ　研究の結果と考察

１　「語ろうデー」への参加について

（１）参加の理由

表２に参加者の参加理由を示す。複数回答である。

表２　参加者の参加理由

（人）

	2018年度	2019年度	合計
○○に勧められて			
園長・所長	12	15	27
市町の研修・指導主事	0	2	2
同僚	0	2	2
参加経験者	0	1	1
目的を持って			
保育を見たかった	5	10	15
保育討議に参加したかった	1	6	7
保育環境を見たかった	5	0	5
興味を持って			
案内が楽しそうだった	5	7	12
以前参加してよかった	0	5	5
研究会に来て勉強になった	0	1	1
その他			
	1	2	3

参加の理由で一番多かったのは，「園長・所長の勧め」であり，約半数が回答している。中には，園長が園行事の振替休日の日程を調整して園の職員全員を参加させているケースもあった。２番目は，「保育を見たかった」で，参加者の約４分の１に当たる15名が回答している。３番目は，“ネーミングに興味を持ったから”や，“HPで見つけて楽しそうだったから”など「案内が楽しそうだった」であり，「保育について語ろうデー」という会の名称に魅かれての参加だと考えられる。

次に，2018年度と2019年度の参加理由を比べると，2019年度には，「保育を見たかった」，「保育討議に参加したかった」が増加し，「保育環境を見たかった」が０になっていることがわかる。これらは，「以前参加して良かった」というリピーターが生まれたことや，参加経験者からの情報等により，「市町の研修・指導主事」「同僚」「参加経験者」などの勧めがあり，公開保育や保育討議を目的とした参加の増加につな

がったためだと考える。

「その他」には，“行事や出張がなかった”“自園で開催する研究会の参考のため”“母園なので懐かしかった”という回答があった。

（2）参加について

58名のうち56名が参加して「良かった」，2名が「まあ良かった」と回答した。また，38名が次回も「ぜひ参加したい」と回答し，19名が「できれば参加したい」と回答した。1名は記入なしだった。

参加者のほとんどが参加について肯定的な回答をしたことが分かった。ただ，次回の参加についての肯定的な回答の数字が若干下がるのは，園外研修への参加は各参加者の一存では決められないことや，保育討議の場で語ることに対する負担感が少なからずあるのではないかと推察される。

2 「語ろうデー」が参加者にもたらしたもの

（1）参加について感じたこと

① 公開保育への参加について

公開保育への参加について感じたことの記述を分類したところ，「じっくりと参観」「子どもの身になって」「保育者の立場に立って」の3つに整理された（表3）。

「じっくりと参観」が4件あり，研究発表会に比べて少人数だったために，子どもや保育者の様子，遊びの展開をしっかりと参観できたことについて記述されていた。

また，「子どもの身になって」と「保育者の立場に立って」はともに3件だった。「子どもの身になって」には，子どもと保育者が遊ぶ様子に引き込まれたことや，女の子の気持ちの高まりを感じ応援したことがあげられていた。「保育者の立場に立って」では，子どもの遊ぶ様子に魅かれつつ，自分が担任保育者だったらどのようにかかわるか考えていたことが記述されていた。

「語ろうデー」での公開保育は，参加者にゆっくりとした気持ちで保育を見ることを可能にしたと言える。それは，参加者が少人数であることや，子どもの登園から降園までの1日の生活そのものの参観であったためだと推察される。そのことにより，遊びに引き込まれ子どもの身になって心を揺らしたり，担任保育者の気持ちになって保育者としてのかかわりを考えたりしていたことが読み取れる。

② 保育討議への参加について

保育討議への参加について感じたことの記述を分類したところ，「深まりや手応え」「共感」「温かな雰囲気」「語ることの大切さ」「すっきりした」「本音は言えない」の6つに整理された（表4）。

一番多かったのは，「深まりや手応え」(10件)で，丁寧な保育の振り返りや，保育者の内面の読み取り，互いの意見が飛び交う様を目の当た

表3 公開保育への参加について感じたこと

（ ）記述の数

項目	参加者の主な記述
じっくりと参観（4）	・参加者を少人数にしていたので，子どものつぶやき，遊びの展開，先生たちの言葉かけなどじっくりと見ることができた。 ・いつも参加している附属の研究会より，今回は少人数だったので，子どもたち，先生，遊びの様子をしっかりと見ることができてうれしかった。
子どもの身になって（3）	・子どもたちが生き生きとしている姿や，先生方が子どもたちと一緒になって遊んでいる姿が楽しそうで，私も入りたいと思ってしまった。 ・あの女の子は少しずつ勇気を出していっているなと感じ，ひそかに「頑張れ」と応援したくなる場面だった。
保育者の立場に立って（3）	・4歳男児，園庭で蝶捕りに一生懸命で，何度転んでも逃げられてもあきらめずに捕まえようとする姿に，自分が担任ならこの男児にどうかかわっていくのだろうと思った。

りにして，語り合いの深まりや手応えを感じているという記述だった。

続いて多かったのは，「共感」と「温かな雰囲気」でともに８件だった。「共感」では，悩んでいるのは自分だけでなく，附属の職員も他園からの参加者も同じような悩みを抱えていることに気付き，共感し，安心感を抱いている。“私が一番嬉しかったのは「悩んでいいんだよ」「困っていいんだよ」「成功なんてないんだよ」と同じようなことで悩み考えている先生がいるということを知れたことだ”という記述からは，日頃から失敗しないように張り詰めた気持ちで過ごしていることが窺える。また「温かな雰囲気」についての記述には，“笑いあり涙ありで

表４　保育討議への参加について感じたこと

（ ）記述の数

項目	参加者の主な記述
深まりや手応え（10）	・子どもや自分の保育についてなど丁寧に振り返って話し合い，悩みながらも深まっている感じがした。 ・子どもの心の読み取りだけでなく，先生自身の心の読み取りをしたり，参加している先生同士が自分の思いを次々と言い合える場になっていたので，自分にとって内容が濃く，充実した時間を過ごせた。 ・まだまだ経験が浅く，先生方の意見が本当にためになり，明日からの保育に生かせる一日になった。
共感（８）	・附属の先生たちも悩んだり方法を試したりしながら全力で子どもと向き合おうとする姿が印象的で，悩んでいるのが自分だけではないとわかって安心した。 ・私が一番嬉しかったのは「悩んでいいんだよ」「困っていいんだよ」「成功なんてないんだよ」と同じようなことで悩み考えている先生がいるということを知れたことだ。 ・事例研では，保育者の心の揺れが良く伝わってきて，正解のないこの仕事では，保育者が揺れ動いていることが大事だし，それを事例研でさらけ出すことができていて本当の事例研に参加できたような気がした。
温かな雰囲気（８）	・先生方の意見交換している雰囲気が笑いあり涙ありでとても温かかったのが心に残った。 ・思ったことをズバズバ言って，ざっくばらんに本音トークする事例検討はとても素敵だし，サークルの形に机を配置することでリラックスして打ち解けることができる。 ・はじめは少し緊張することもあったが，温かい園の雰囲気に穏やかな気持ちになり，「語らなくては」という思いで参加したが，参加して皆さんの話を聞いているうちに「語りたいな」と思うようになった。 ・まだ未熟な自分が何を言えるのか不安だったが，「何でもどうぞ」的な雰囲気と，「正解や間違いはない」と言ってくれたことで，発言しやすかった。
語ることの大切さ（４）	・学んだことはたくさんあるが，語ることで前に進めることがよく分かった。 ・人の話を聞くだけでなく，自分の思いや保育について話すということは，とても勉強になることを感じた。 ・○○先生が保育の中での悩みや葛藤を素直に話し，自分の保育をより良いものにしていこうとうする姿勢は，日頃から△△市の保育を共に担っていく職員として心強かった。
すっきりした（２）	・他園の先生方との交流の中で，日頃のもやもやもが少し解決された。 ・勤務園では言いにくいことも，ここではいろいろな方向からアドバイスをもらえて嬉しかったし，自分が抱えている悩みを話せてすっきりした。
本音は言えない（１）	・冬の保育に水を使うのは…と話している時，本音までは言うことができなかった。服が汚れて帰ったらおうちの方に迷惑をかけてしまうので…と話すと，附属の先生方は，「？？」の表情をされ，汚れたからどうこう言われたことはないと言われたが，やはり保育所の保護者の方は長時間仕事をされている方が多いので，家事が増えてしまうのでは…と考えてしまう。

とても温か”“ざっくばらん”“リラックス”“「何でもどうぞ」的な雰囲気”という言葉が並んでいる。参加にあたって多少の緊張感や負担感をもっていただろうと思われるが，温かな討議の雰囲気により，「語らなければ」というプレッシャーから「語りたい」と気持ちが変容したことがわかる。

その中で，“語ることで前に進める”と感じたり，同じ市から参加した職員が語っている姿を心強く思ったりするなど，４件の「語ることの大切さ」についての記述があった。また，実際に語ったことにより，“もやもやが少し解決され”「すっきりした」という意見も２件あった。

一方で，保育所と幼稚園の保護者の就労状況の違い，国立大学附属幼稚園と公立保育所の考え方の違いを察し，“本音までは言うことができなかった”という記述もあった。記述は１件のみだったが，同じ場にいた筆者には，そのような感情を抱いた参加者は他にもいるように見え，参加者の発言に対する開催者側の構えが問われる場面だったと感じた。

（２）今後の自分の保育や自園の研修について

①　保育について

今後めざしていきたい保育についての記述を分類したところ，「焦らずゆとりをもって子どもを見守る」「子どものやりたい気持ちを大切にする」「一人一人の子どもに寄り添う」「子どもと一緒に遊びを楽しむ」「その他」の５つに整理された。表５に，それぞれの項目の主な記

表５　今後の自分の保育について

（ ）記述の数

項目	参加者の主な記述
焦らずゆとりをもって子どもを見守る（9）	・３歳児の担任保育者のかかわりが丁寧で，子どもの気持ちを前向きにしていると思い，私自身，もっとゆとりをもって保育をしたいと思った。 ・蝉捕りをしている５歳児男児たちを傍で見つめていた担任保育者のかかわりによって，子どもたちは自分たちで考え，のびのびと過ごせるんだろうなと感じ，私も見習いたいなと思った。 ・短期間で見るのではなく，長時間で子どもの育ちや学びを見ていき，子ども一人一人の思いをしっかりと受け止めていかなければならないと思った。 ・就学を焦ってかかわりがちであるが，今何を育てたいのか順序を追って育ちにつなげている姿が印象的で，自分もそのような保育をめざしていきたい。
子どものやりたい気持ちを大切にする（8）	・野菜を収穫したら子どもの「食べてみたい」という気持ちを大切にしており，私も日々子どもたちのやりたいという気持ちを大切にしていきたいと思った。 ・子どもたちの生き生きとしている姿を見て，「危ないから～したら」と言いたくなる私の感覚を一度消して禁止せず，子どもが遊びこめるための環境や自身の考え方を改め直していこうと思った。 ・雨の中，元気よく戸外で遊んでいる子どもたちの姿が心に残り，雨が降らなければ体験できないこともあり，自然現象を利用した遊びをもっと取り入れていきたいと思った。 ・パラグライダーをしている子どもの発想力に驚き，もっと挑戦してもよいかなと，自分の保育を振り返り思った。
一人一人の子どもに寄り添う（4）	・子どもの表情，言葉，仕草などいろいろなところから，今何を感じているか，楽しんでいるか考えられる人になりたいと思った。 ・一人一人の姿の背景を自分自身も読み取り，認めていきたいと改めて感じた。
子どもと一緒に遊びを楽しむ（3）	・保育者が，本気で喜ぶことで子どもも本気を感じ取り，夢中で遊び悔しがる姿に，自分もしっかり遊びの楽しさを子どもと共有し自己発揮できるようにしたいと感じた。
その他（2）	・私一人では難しいので，同年代の他の先生方も巻き込んで保育が楽しいと思えるよう先生が増えてくるように努めていきたい。 ・なかなか園に持ち帰っても実現できないが，少しずつできることから取り入れながら自分の中に取り込んでいきたい。

述を抜粋する。

記述で一番多かったのが，「焦らずゆとりをもって子どもを見守る」（９件）だった。３歳児担任の子どもへの丁寧なかかわりや，５歳児担任の一歩下がったかかわりなどを通して，焦らずゆとりを持って保育したいと考えたことがわかる。参加者が取り上げている場面は様々であるが，保育者の姿を通して，つい短期での結果を求めたり，就学に向けて焦りを感じたりするなど自身の時間的なゆとりのなさに対する気付きが見える。

また，「子どものやりたい気持ちを大切にする」についての記述も８件見られた。子どものやりたい気持ちよりも，衛生管理や安全管理が優先されている現状が窺える。のびのびと元気よく発想豊かに遊んでいる子どもの姿から，自分の保育を見直し変えていきたい，挑戦していきたいと考えていることがわかる。

「一人一人の子どもに寄り添う」（４件）や「子どもと一緒に遊びを楽しむ」（３件）の記述もあった。

ここであげた記述は，どれもこれまでの保育観や子ども観を大きく変容させるような新たな発見や気付きではない。むしろ幼稚園教育要領等に示されているような，保育者の基本的な姿勢である。公開保育を通してこの保育の原点とも言えることを改めて再確認し，自分の実践を変容させたいと考えている。これは，日常の保育において，安心・安全の旗のもと，短期の結果を求められる中で時間に追われ，子ども一人一人に寄り添い，一緒に遊びを楽しむことが難しくなっていることの表れであろう。

「その他」（２件）の欄に，“私一人では難しいので”“なかなか園に持ち帰っても実現できないが”という記述がある。保育参観による自身への気付きから生まれた新たな課題をすぐに行動につなげていくことは難しいが，それでもなお，自分の保育実践の中に生かしていきたいと考える参加者がいることがわかる。

②　園内研修について

今後めざしていきたい園内研修についての記述を分類したところ，「園内研修の取り組みの工夫」「自分自身の変容」「同僚性の構築」の３つに整理することができた。表６に，それぞれの項目の主な記述を抜粋する。

「園内研修の取り組みの工夫」については，９件の記述があった。“何気ないことをじっく

表６　今後の自園の園内研修について

（ ）記述の数

項目	参加者の主な記述
園内研修の取り組みの工夫（９）	・何気ないことをじっくり考えるということを自分の園でもしていきたいと思った。 ・日々の保育について語ることが自身の保育を深く考えることにつながると勉強になったので，それが日常となるよう時間等工夫していきたい。 ・自園でもこのように保育について先生同士で話し合うことができる雰囲気づくりと時間の確保などを考えていきたい。
自分自身の変容（５）	・午後からの保育討議では，先生方の熱い思いや学び続けようとする姿勢を感じ，まだまだ頑張らなくてはと思った。 ・私は事例を書いたことがないが，事例として文章にすることで改めて保育を見直したり，他の先生方の意見を聞くことができるので，私も事例を書く力を身に付けたいと思った。 ・自園での現教とどこが違うのか…と考えると，深まりが足りないのだと感じ，私自身がもっと幼稚園教育要領の解説を読み込んで理解していくことが大切だと思った。
同僚性の構築（２）	・みんなが同じ方向，同じ思いで子どもに接しているので，子どもたちも安心して生活しており，そのような職員関係になれるように努力していく必要性を感じた。

り考えるということを自分の園でもしていきたい”とあるように，日常の保育の中にある出来事をじっくりと考え話し合うことの重要性に気付き，自園においても取り組みたいと考えている。そのためには，“話し合うことができる雰囲気づくりと時間の確保”が課題であるようだ。

「自分自身の変容」についての記述は，５件だった。“まだまだ頑張らなくてはと思った”“私も事例を書く力を身に付けたいと思った”“私自身がもっと幼稚園教育要領の解説を読み込んで理解していくことが大切だと思った”など，学び続ける保育者としてこれまでの自分を変えていきたいと感じている。

「同僚性の構築」については２件の記述があった。より良い職員関係になるために努力する必要があると感じている。

３　1，2の分析から

「語ろうデー」への参加理由は，園長・所長の勧めによる参加が約半数にのぼっていたが，ほとんどの参加者が，「参加して良かった」「次回も参加したい」と満足していたことがわかった。また，公開保育や保育討議への参加を目的とした参加理由が増えたのは，参加経験者が参加の輪を広げる役割を果たしたからだと考えられる。

午前中の公開保育においては，参加者が少人数だったため，子どもの様子や遊びの状況，担任保育者のかかわりなど，保育実践をじっくりと見る機会をもつことができ，子どもの身になって心を揺らし，担任保育者の立場に立って実践について考えていた。また，焦らずゆとりをもって子どもを見ることや，子どものやりたい気持ちを大切にすること，一人一人の子どもに寄り添うこと，子どもと一緒に遊びを楽しむことなど，保育者の基本的な姿勢を改めて再確認している。このことは，参加者が多忙な毎日の中で，目の前のことに追われ，改めて自分の保育について振り返る機会がもちにくくなっている現状を表していると考える。また，研究発表会等での公開保育においては，大人数の参加者とともに限られた時間で保育参観を行うため，じっくりと子どもの声に耳を傾け，保育者の葛藤に心を揺らすことは難しいが，「語ろうデー」では，子どもと保育者の姿を通して自分自身に向き合う時間をもてたと言える。

午後の保育討議では，子どもや保育者の内面について丁寧に話し合うことにより，深まりや手応えを感じていた。附属幼稚園の職員や他園からの参加者も同じように悩んでいることを知り共感し，温かな雰囲気の中でリラックスして話すことにより「語らなければ」というプレッシャーから「語りたい」へと気持ちが変容していた。また，語ることの大切さに気付き，悩みを話すことですっきりしたようだ。ただ，保育所からの参加者は，保育所保育ならではの事情について，本音を語ることが憚られた心境を記述していた。

参加者は，園内研修の時間の確保や温かな雰囲気作りなどの工夫，自分自身の変容，同僚性の構築など自身の新たな実践課題を見出している。松本ら[13]は，外部公開された保育カンファレンスへの参加により，参加者が，正解や不正解に左右されずに子どものことを語る意義や楽しさを体験したこと，他園の保育者の多様な意見を聞く機会となったこと，幼児理解に関して保育者としての成長を感じたことなどを述べている。「語ろうデー」においても，語ることの意義や他園からの参加者との交流，自身の変容を感じていることなど共通点が多い。しかしながら，「語ろうデー」では，附属幼稚園や他園の保育者も悩み心を揺らして実践していることがわかり，保育に携わる者としての深い共感や安心感を得たことがあげられている。これらは，公開保育と語りの場が連続しており，午前中，子どもや保育者と共に心を揺らし過ごしたからこそ生まれてきたものだろう。

Ⅳ　総合考察

ここまで，アンケート調査の結果から，「語ろうデー」への参加者が参加について感じたことや，今後の自分の保育や自園の研修について考えたことを明らかにしてきた。「語ろうデー」への参加により参加者にもたらされたことは次

の３点だと考える。

１点目は，保育者としての責任ある立場を離れ，他園で一日を過ごすことにより，自分の実践や自園の取り組みの現状に気付くことができた点である。頭の片隅でそれらの問題点や行き詰まりなどについて感じながらも，目まぐるしい毎日の中で，敢えて見ないようにしていたことが浮上し，その結果，本当に大切にしたい保育者としての基本的な姿勢が見えてきた。それらが，日々の忙しさや，園の方針，子どもの安全管理の優先などにより，後回しにされていたのである。無藤ら[14]は，大学や附属幼稚園の教員らが中心となる研究会への参加者は，その研究会へ参加することが「保育を見直す機会」となるとしており，「保育とは何か，保育者の専門性とは何か，そこで何を目指すべきかということ自体を問う」と述べている。「語ろうデー」への参加者も同様に，公開保育の参観や保育討議への参加を通して，保育の基本に立ち戻っていると考える。

２点目は，悩んでいるのが自分だけではないことを感じ深い共感と安心感を得たとともに，「正解や間違いはない」と受け止められたことにより「語りたい」と心が動いた点である。濵名ら[15]は，園内研修では，若手保育者のみならず経験を重ねた保育者であっても，経験年数に応じた役割プライドによりプレッシャーを感じ，語り合いに困難さを感じている現状を指摘している。多くの保育者が，自分の保育実践について語ることに対する抵抗感や負担感を感じている中，「語ろうデー」への参加者は，「語りたい」気持ちを生み出している。

３点目は，温かな語り合いの中で，新たな実践課題を見つけることができた点である。「語ろうデー」は，研究成果を発信するための研究発表会や今日的な保育課題に特化した研修会とは異なり，参加者に意図的な学びを提供しているわけではない。日常の保育と園内研修を公開している。そのため，参加者は，それぞれが目の前で繰り広げられる保育実践を参観し，その中で気付き，考え，自分なりの今後の課題を見出している。それは，保育実践の中での自身の在り方や，園内研修の工夫，職員との関係性，自身の資質向上のための取り組みなど様々であるが，他者から与えられたものではなく，自分で見つけた自分自身の新たな課題である。

以上のことから，「語ろうデー」への参加が，参加者に現状への気付きや自身の実践課題の獲得をもたらすことが明らかになった。先述したように，片岡ら[16]は，ミドルリーダーの育成をめざす「探究型研修」の行動変容について検討した結果，研修転移が起こるためには，研修参加者が園内における役割を「自覚」し，「相談」体制が構築されることが必要だと述べている。つまり，「自覚」と「相談」が研修転移を起こす重要な要素だと言う。「語ろうデー」への参加者が自らの実践課題を獲得したことは，園内での役割の「自覚」とは異なり，あくまでも個人的なものに過ぎない。しかし，意図的な学びを提供する研修会とは異なる「語ろうデー」において，自身の保育実践や自園の研修を振り返ることを通して見出した新たな実践課題の「自覚」は，今後の行動変容を促す可能性をもつと考える。

現在の保育では，子どもの内面の育ちや生涯にわたる学びの基礎となる部分の育ちよりも，短期的な結果や成果を求められることが多い。保育者は，そのような期待に応えようと子どもを行事の練習や知識の習得などに駆り立て，かえって実践の苦しさを抱えている。田中[17]は，「有用性志向が広がる中で気前よさや寛容性が教育の世界から失われ，子どもたちが絶えず競争へと駆り立てられている」と言う。同様に，保育者もまた，若手保育者は早く一人前の保育者として独り立ちできることが期待され，中堅保育者のミドルリーダーとしての育ちも急がれている。そのため，管理職や先輩保育者から，常に不足している知識や技能についての指摘や指導を受ける。保育者としての育ちを長い目で待ってはくれず，自分の実践について振り返り，自分で気付き考える機会を奪われているとも言える。

今回のアンケート調査の結果から，参加者が園に戻った後の状況について明らかにすること

はできなかった。また，「語ろうデー」への参加により得られた参加者の新たな実践課題の「自覚」が直ちに園内の「相談」体制の構築や，保育者の行動変容につながっていくわけではないだろう。このことは，「語ろうデー」の園外研修としての限界であると言える。しかしながら，保育者の資質向上をもう少し長いスパンで捉え，一人一人の保育者が，保育者としての自分に向き合いながら自身を見つめ直す時間の保障も必要だと考える。「語ろうデー」のある参加者が，“仕事で行き詰っていたり，疲れて思考が止まっていたりしている時でも，この会に参加すると，なぜかエネルギーがわいてくる。私は，やっぱりこの仕事がしたいとスタートの気持ちになれる”と述べている。公開保育や保育討議に参加することにより，他園の子どもや保育者に心を寄せ，地域の保育者同士での語り合いに喜びを感じながら，自分自身を振り返り，新たな実践課題を「自覚」する，そのような研修も求められていると考える。自ら獲得した実践課題の「自覚」が，今後，行動変容をおこす可能性を秘めている。

このように考えると，それぞれの園が日常の保育を公開し，近隣の幼稚園や保育所等から参加者が集い，参観での気付きや疑問を気軽に語り合う場を設けることには大きな意味があると言える。「語ろうデー」のような研修が，保育者自身に現状への気付きと新たな実践課題の「自覚」をもたらすのである。片山[17]は，神戸市での公開保育（みてみて保育）の取り組みについての報告の中で，「互いの訪問による気付きを授受し合うネットワークの存在が，自己改善エネルギーを生み出す」と述べている。国立大学附属幼稚園には，研究発表会のような大きな規模での公開保育・保育討議を通して，研究成果を発信･共有していく役割だけでなく，「語ろうデー」のような少人数での公開保育・保育討議を介した地域の学びのネットワーク構築の担い手となることも望まれる。さらに，「語ろうデー」の実践が，地域における現場間での取り組みのモデルとなり，それぞれの地域での実施に生かされていくことが重要である。

Ⅴ　まとめ

ここまで，「語ろうデー」への参加者が，他園の公開保育・保育討議への参加を通して，保育者自身に現状への気付きと新たな実践課題の「自覚」をもたらすことについて述べてきた。

ここで重要なことは，教員の研修学校としての役割を担う国立大学附属幼稚園が，参加者自身に新たな実践課題の「自覚」を促すような保育実践や園内研修を公開することである。それは，保育者としてあるべき理想の姿を示すことや，素晴らしい保育環境を準備することではなく，子どもたちと保育者集団が紡ぎ出す保育の営みをありのまま見せることである。その生の保育が，参加者との対話を生成する。この時，参加者の内面から語られた言葉に耳を傾け，自身の保育を振り返る謙虚な気持ちをもち，共に学ぶ保育者の一人として在ることが大切であろう。

今回の研究では，「語ろうデー」への参加者のアンケート調査の結果を一律に考察したため，経験年数や役職等による違いについて分析することはできなかった。そのため，参加者個人の新たな実践課題の「自覚」について見出すことはできたが，ミドルリーダーとして責任を果たすことを期待されている中堅保育者や，園経営の在り方を問われている管理職の役割の「自覚」や，「相談」体制の構築への意識について確認することができなかった。また，「語ろうデー」への参加を通して新たな実践課題を「自覚」した参加者が，それぞれの園に戻り，その課題にどのように向き合うことになったのかについてはこれからの課題である。今後，「語ろうデー」への参加者のキャリアに視点を当て参加後を追跡し，その行動変容について考察を深めていきたい。さらに，「語ろうデー」の開催者である附属幼稚園の保育者の行動変容についても，研究を進めていきたいと考えている。

謝辞

本研究の実施に当たり，「語ろうデー」への参加者の皆様にアンケート調査の実施について多くのご協力をいただきました。ここに感謝の

意を表します。

付記

本研究の実施にあたり，香川大学教育学部・附属学校園共同研究機構研究プロジェクト：平成30年度『「語ろうデー」の実施における参加者と実践者の気付き』・令和元年度『「語ろうデー」への参加は保育者の行動変容につながるか』（研究代表者：片岡元子）の助成を受けた。

また，本論文はその一部を，日本保育学会第73回大会にて発表している。

参考・引用文献

（１）ベネッセ教育総合研究所（2019）第３回幼児教育・保育についての基本調査.
https://berd.benesse.jp/jisedai/research/detail1.php?id＝5444（情報取得2020/11/２）

（２）文部科学省（2019）幼児教育推進体制の充実・活用強化事業.
https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/youchien/1405077_00005.htm
（情報取得2020/11/２）

（３）厚生労働省（2017）保育所保育指針

（４）保育所等における保育の質の確保・向上に関する検討会（2020）議論の取りまとめ 「中間的な論点の整理」における総論的事項に関する考察を中心に.
https://www.mhlw.go.jp/content/000647604.pdf（情報取得2020/11/２）

（５）関勤（1980）公開保育の意義と重要性―幼稚園や保育所の研究発表会はなぜ必要か―．茨城大学教育学部教育研究所紀要，13，113-120.

（６）片山喜章（2013）保育者を支援するネットワーク―「公開保育（みてみて保育）」の新たな取り組み形態と多様性の理解―．ミネルヴァ書房，発達134，53-58.

（７）中原淳（2014）研修開発入門　会社で「教える」，競争優位を「つくる」．ダイヤモンド社

（８）中原淳・島村公俊・鈴木英智佳・関根雅泰（2018）研修開発入門　研修転移の理論と実践．ダイヤモンド社

（９）片岡元子・松井剛太・松本博雄・髙橋千代（2020）保育者の行動変容を促す「探求型研修」の検討―研修をデザインする側の視点から―．保育学研究，58（2&3），233-244.

（10）同上

（11）文部科学省（2017）教員需要の減少期における教員養成・研修機能の強化に向けて―国立教員養成大学・学部，大学院，附属学校の改革に関する有識者会議報告書

（12）同上

（13）松本信吾・中坪史典・杉村伸一郎・金岡美幸・日切慶子（2013）保育カンファレンスの外部公開は他園からの参加者に何をもたらすのか．広島大学学部・附属学校共同研究機構研究紀要，41，133-140.

（14）無藤隆・森下葉子・齋藤久美子・高濱裕子（2007）保育者の研修に対して大学と附属が寄与するあり方をめぐって―幼児教育未来研究会の実践から考える―．お茶の水女子大学子ども発達教育研究センター紀要，４，35-44.

（15）濵名潔・保木井啓史・境愛一郎・中坪史典（2015）KJ法の活用は園内研修に何をもたらすのか―保育者が感じる語り合いの困難さとの関係から―．中国四国教育学会教育学研究ジャーナル，17，21-30.

（16）前掲（９）

（17）田中智志（2012）教育臨床学〈生きる〉を学ぶ．高陵社書店

（18）前掲（６）